

次の**キオクシア**はここから生まれる？

イーロン・マスクが描く
3つの未来から見えてくる

[新]メモリ トレンド

HBMの次に浮上する新潮流

HBM
3.8兆円

新メモリ
13.4兆円

約**3.5**倍

SAMSUNG

SK hynix

Micron

序章

次のキオクシアはここから生まれる？

私の見立てでは今、イーロン・マスクは同時に3つの未来を作ろうとしています。それが本書の入り口です。

- 完全自動運転のロボタクシー「Cybercab」
- 数十億人の労働力を代替する人型ロボット「Optimus」
- 地球の電力と土地の制約から解放する「AI宇宙データセンター」

世間はこの3つをまったく別々のプロジェクトとして見えています。

自動車、ロボット、宇宙開発。事業領域としてはバラバラで、ニュースだけを追えば、それぞれ全く別の話に見えます。

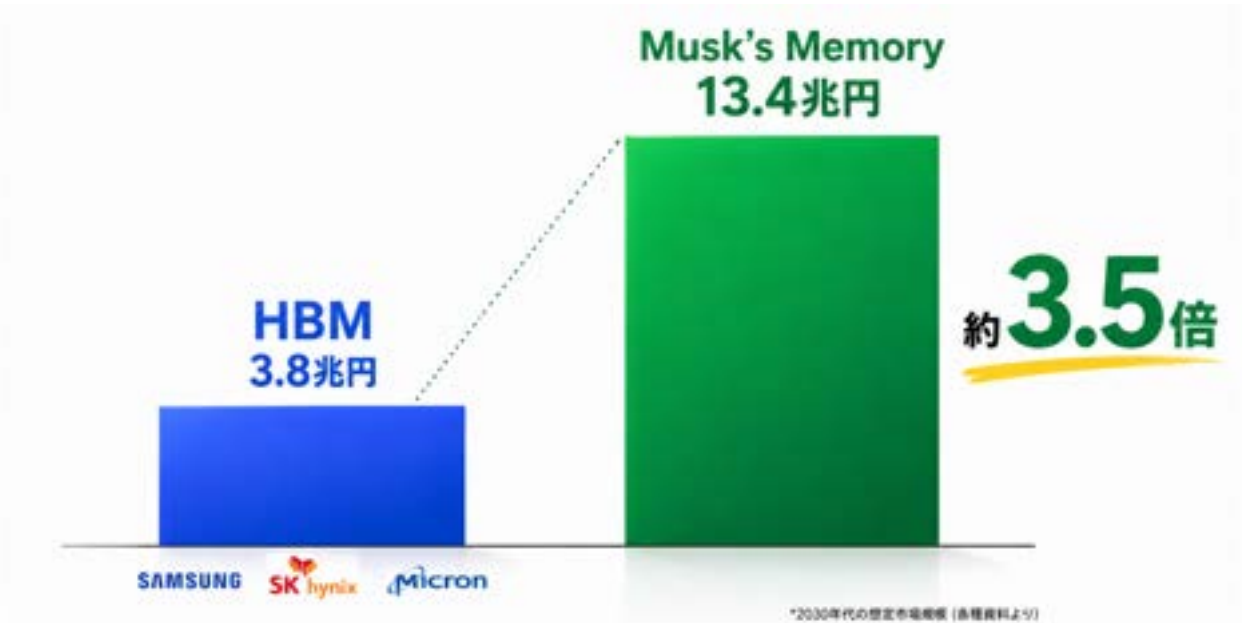
3つの未来に共通する「ある部品」

ところが、この3つを裏側から支えることになる可能性を秘めた、ある共通部品があります。しかもその部品は、すでに別の形で株価を1000%以上押し上げた実績があるジャンルのものなんです。

メモリです。マイクロンやSKハイニックス、サムスンといったメモリ企業の株価を押し上げたHBMというメモリをご存じでしょうか？

HBMは、エヌビディアのチップに搭載されるAIメモリとして、GPUと同じくらい投資家の間で名前が挙がるようになりました。

ただ、私がマスクの3つの未来を支えると考えるのは、HBMではありません。性質も役割も異なる全く別のメモリです。そして、このメモリの市場規模は、HBMのさらに3.5倍になると予測されています。



HBMだけであれだけの株価上昇を生んだのに、その3.5倍。なぜ、このメモリはそこまで期待されているのでしょうか？

理由は単純です。このメモリこそが、AIが次の段階へ進むために欠かせない「鍵」になりうるからです。

キオクシアが20年以上追いつけた「もう一つのメモリ」

実はこのメモリ、日本のある企業が20年以上前から水面下で追いかけてきたものでもあるのです。

今年トヨタ自動車を抜いて、日本の時価総額ランキング1位に躍り出た企業です。

その企業とは、キオクシアです。市場が注目する顔とは別に、まだ見落とされている「もう一つの顔」があります。

多くの投資家がキオクシアに対して持っているイメージは一つだけです。スマホやハードディスクの中に入っているフラッシュメモリチップを作る会社、というものです。世間が注目しているのは、その話ばかりでしょう。しかしその裏で、東芝時代から20年以上、彼らが研究開発を続けてきた「もう一つのメモリ」が存在するんです。

このメモリはHBMが輝けなかった場所でこそ本領を発揮する可能性を秘めています。詳しくは後ほど解説しますが、マスクが描く未来は、まさに"HBMが輝けない場所"の話ばかりなんです。ただ、誤解してほしくないのは、マスク自身が現時点でこのメモリを開発しているわけではないということ。彼が実現しようとしている未来を追いかけていくと、不思議なほど何度もこのメモリが姿を現します。

Musk's Memory

だから私は敬意を込めて、このメモリをこう呼んでいます。Musk's Memoryと。キオクシアが20年以上追いかけ、イーロン・マスクの野望を支える可能性を秘めた新メモリ。それが「Musk's Memory」です。

本書ではこのMusk's Memoryの正体、そしてなぜこれが「AIが次の段階へ進むための鍵」なのか、そこから利益を狙うための具体的な視点を順を追って解説します。まずは前提として、AIメモリの現在地から見ていきましょう。かつて半導体業界で「コモディティ」と嫌われていたメモリの世界で、なぜ今これほどの大ブームが巻き起こっているのか。そこには単なる偶然では片付けられないある共通したパターンが隠れています。そこを紐解くことで、Musk's Memoryから利益を狙うチャンスが見えてきます。

第1章

2度の1000%超を生んだAIメモリ市場

ここで一つ、お伝えしておきたい事実があります。この3年間で、AIメモリ市場ではすでに2度、1000%を超える上昇相場が起きているということです。

重要なのは、この2度の相場が、まったく別のタイミング、別の理由で起きているという点です。つまり、これは偶然ではなく、繰り返されるパターンだということ。まずこの2つの相場を振り返ります。そうすることで、なぜ私が「3度目が過去最大の規模で来る」と考えているのかその理由が見えてきます。

1度目の1000%超：DRAM（HBM）

まずはこの決算を見てみましょう。どちらも初めて時価総額1兆ドルに到達した直後の数字です。どちらがエヌビディアで、どちらがマイクロンでしょう？



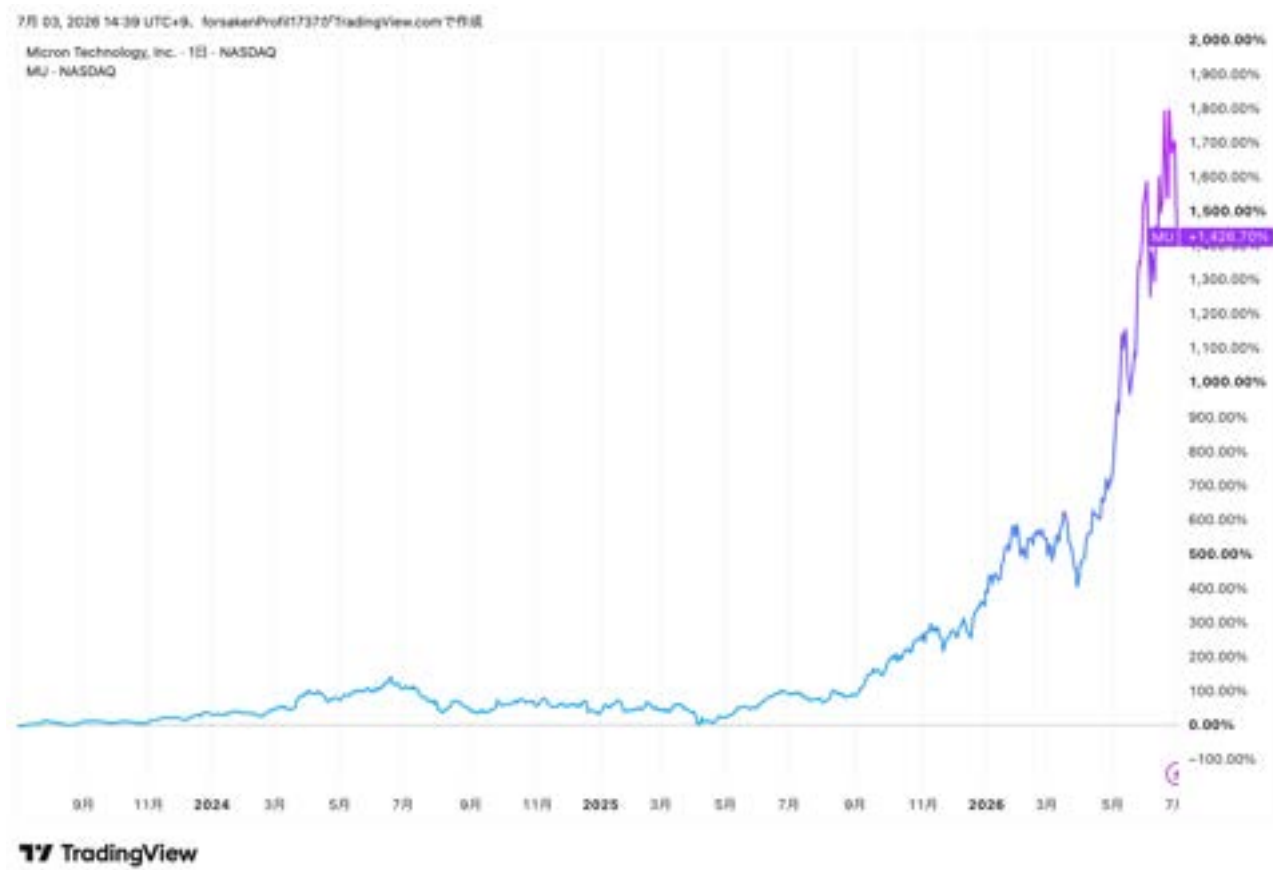
【図版挿入位置】A社が2023年のエヌビディア、B社が2026年のマイクロンです。マイクロンは売上でエヌビディアの3倍以上、利益では5倍近くに達しています。同じ1兆ドル到達時点で比較しても、中身がまったく違うんです。

一体、何が起きているんですか？背景にあるのは1度目の1000%上昇の舞台、DRAM（HBM）の深刻すぎる供給不足です。DRAMの価格はわずか1年で6倍以上に急騰し、アップルでさえ確保に苦しみ、アメリカ政府がブラックリストに載せている中国企業からの購入承認をトランプ政権に求めているほどです。

このメモリは処理スピードが圧倒的に速い一方、電源を切るとデータがすべて消える「揮発性」という性質を持つメモリです。24時間電力が供給され続けるデータセンターだからこそ輝きます。

おっしゃる通り。ですが24時間電力が供給され続けるデータセンターの中では問題になりません。そしてこの特性と引き換えに手に入れた圧倒的な速さが生成AIには不可欠でした。生成AIは膨大なデータをGPUに流し込み続けなければ動きませんから、GPUのすぐ隣で高速にデータを渡すHBMが、AIブーム最大級のボトルネックを突破する鍵になったんです。

世間がエヌビディアのGPUばかりを追いかけていた2023年、私が見ていたのはまさにこのボトルネックでした。その観点から分析したレポートで、私はマイクロンの成長余地を指摘しました。その後どうなったか、皆さんもご存じですよ。マイクロンは1400%を超える上昇を起こしました。これが1度目の相場でした。



Trading Viewより2023/7/3～2026/7/3

今でこそマイクロンに注目するのは当然に思えるかもしれませんが、2023年の状況は真逆でした。メモリ価格は下落し、四半期で約20億ドルの赤字、社員の約10%を削減するリストラまで発表していました。そんな逆風の中で、AIの構造的ボトルネックがメモリにあると見抜いていたわけですから、単なる銘柄推奨ではなく、AIの構造そのものを見抜いていたということですね。こうやって私の推奨で日本人の皆さんの人生を豊かにできていると考えると嬉しい限りです。ただ、私は過去の実績を自慢したいわけではありません。皆さんに知ってほしいのは、ただ一つ、「メガトレンドの中で『真のボトルネック（制約）』を捉えることこそが、最大の利益を生む」ということ。これが3年前のマイクロンで起きたことです。そして、この同じパターンが、まったく違う形でもう一度起きました。

2度目の1000%超：NAND・ストレージ

今年1月、メモリの役割がさらに次のステージへ広がることを示す出来事がありました。エヌビディアCEOのジェンスン・フアンが、これまで見向きもされなかったメモリストレージ市場を「完全に未開拓な市場」と言及したんです。そこで注目されたのが、DRAMとは全く別の性質を持つ、NAND型フ

ラッシュメモリでした。データを長期的に保存するためのメモリでSSDやスマホの写真や動画にも保存しておくストレージにも使われています。

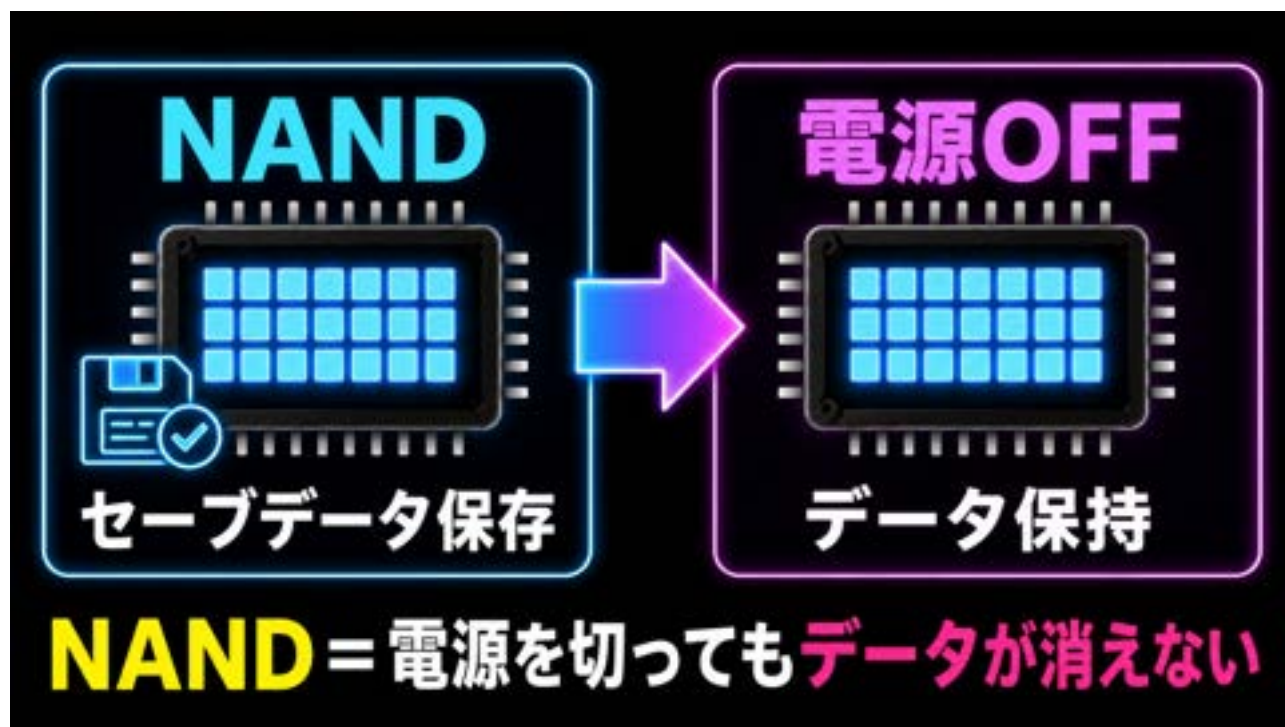
AIは高速な計算が命です。それなのに、なぜ「保存用」のメモリがAIブームの主役になるのでしょうか？

実際に起きた出来事から説明しましょう。METAがAIモデルLlama 3を学習させていたときの話をご存じでしょうか？16,000台以上のGPUを使って、54日間かけてAIを育てていました。ところが、その間、学習システムは**466回**も停止していました。平均すると約3時間に1回です。

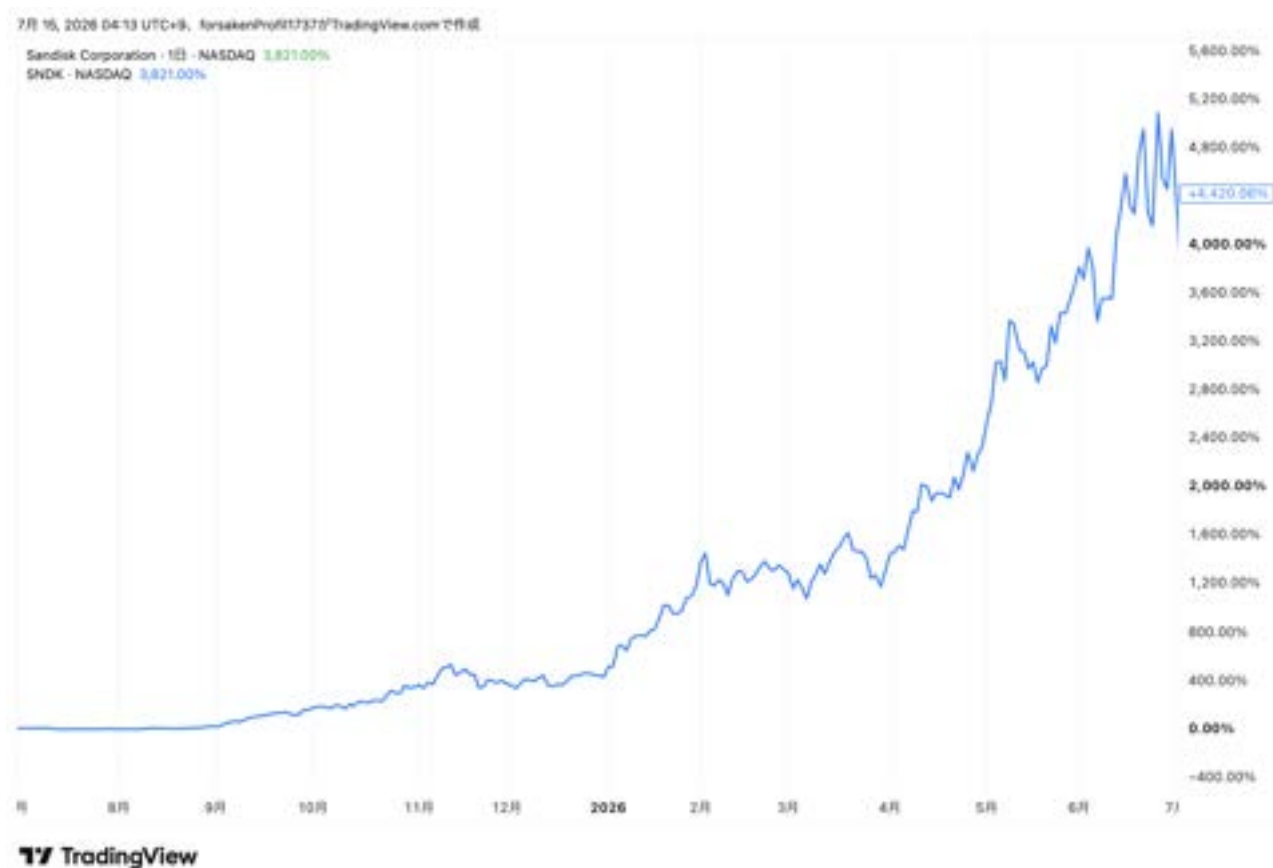
普通ならそうです。もし途中経過を保存していなければ、そのたびに何日、何週間という計算が無駄になってしまいます。だから巨大AIを開発する企業は、定期的に「途中経過」を保存していました。これを**チェックポイント**と呼びます。

チェックポイントは、いわばAIの「セーブデータ」です。

ゲームで何十時間も進めたところでセーブせずに電源が落ちたら最初からですよ。AIもまったく同じです。だから、この「セーブデータ」を保存する場所として、電源を切ってもデータが消えないNANDが不可欠になったんです。



これによりNAND・ストレージ関連企業に巨額の投資資金が流れ込みました。象徴的なのがサンディスクです。2026年だけで500%以上、過去1年では4,000%を超える上昇を見せています。同様の流れはキオクシアやウエスタンデジタルにも起きています。



Trading Viewより2025/7/1～2026/7/1

1度目はDRAM（HBM）、2度目はNAND。異なるメモリ、異なるきっかけで、どちらも1000%を超える相場が起きました。

ただすでに2回も1000%以上のリターンが出ていることを考えると「メモリ市場のチャンスは終わったんじゃないか？」とか「今買うと高値掴みになるんじゃないか？」とも思ってしまうんですが、いかがでしょうか？

2つの相場に共通していた「舞台」

まさに、そこが今回のテーマです。実は1度目、2度目の相場には共通の舞台がありました。それがデータセンターです。AIブームの最初の4年間（2023年から2026年）は言わばAIがHBMとNANDという2つのメモリを引っ提げて、データセンターをハイジャックした期間だったんです。今やデータセンターはただのサーバーの塊ではなく、巨大なAI工場です。しかし、AIの進化はそこで終わりません。むしろここからが第二幕です。私たちの経済活動はスマホやPCの画面の中だけで行われるわけではありませんよね？現実世界には車があり、工場があり、病院があり、ロボットがあり、そして私たち自身がい

POINT 1度目も2度目も、巨大なデータセンターという箱の中でAIが拡大した期間でした。次は、AIが別の場所へ広がっていきます。

ではデータセンターをハイジャックしたAIの次の一手は何になるんでしょう？その答えであり、次に現れる数兆ドル規模の市場を左右するボトルネック、そして私が、過去最大の相場の鍵になると見ているのがこれです。

AIが現実世界へ広がる「50兆ドル市場」

AIをクラウドからエッジへ移す

もっと正確に言えば、「私たちの身の回りにある、バッテリーで動くすべてのデバイス」です。これまでデータセンターという箱の中に閉じこもっていたAIは、いよいよ画面を飛び出し、スマートウォッチ、自動運転車、ヒューマノイドロボット、そして宇宙衛星といった現実世界へと本格的に進出しようとしています。

つまり私が考える、AIが次の段階へ進むための数兆ドル規模のボトルネックは、「AIをクラウドからエッジへ移す」という技術的挑戦にあるのです。

イメージを掴んでいただくためにここで一つ考えてみてください。「AIがどこで考えているのか」を意識したことはありますか？

実は今のAIには、1つの大きな特徴があります。それは、考える場所と「使われる場所」が分かれているということです。

今、AIに何かを入力すると、その情報は一度、遠くのデータセンターへ送られます。そこで計算されて、結果が戻ってくる。これが今のクラウド型のAIです。

では、ここで一つだけ想像してみてください。もし「考える場所」と「使う場所」が何百キロ、何千キロも離れていたら、どういう問題が起きると思いますか？

ChatGPTの返答が少し遅れるくらいなら「通信が重いな」で済みますが、時速数十キロで走る自動運転車や、人間の隣で作業をするロボットを想像してみてください。目の前に障害物が現れてブレーキをかけるたびに、何百キロ、何千キロも離れたデータセンターと電波を往復させて思考していたらどうなるでしょうか？

ほんのコンマ数秒の遅れが、そのまま致命的な事故につながりかねません。

だからこそ自動運転車、ロボット、ドローン、防衛システムのように現実世界で動くAIは、端末そのものがその場で考え、瞬時に判断する必要があるんです。これが、AIのエッジ化が避けて通れない理由です。

変わるどころか、文字通り世界がひっくり返るでしょう。

ウェアラブルのAI搭載率は30%から80%へ

米調査会社カウンターポイントの予測では、2026年から2032年の間に、ウェアラブル機器が生み出す累計収益機会は約1兆ドル。普及率は2025年の30%から2032年には80%まで跳ね上がるとされています。

私たちが身に付ける身近なデバイスの8割に、直接AIが組み込まれる時代が近づいています。

いいところに気がつきました。実は、遅延の話はあくまで表面的な理由に過ぎません。過去20年間、大手テック企業にとって最大の収益源は何だったと思いますか？

彼らはより多くのデータを、より早く、より正確に集めることを競ってきました。そして今、そのための最も合理的な方法が見えてきたんです。それが、AIそのものを「ユーザーのすぐ近く」に置くこと。つまり端末そのものにAIを搭載することなんです。

エッジ化は、遅延という技術的課題の解決だけではありません。

企業の利益の源泉であるデータをいかに取るかという競争のためでもあったということですねこの2つが重なっているからこそ、AIのエッジ化はもう避けて通れない流れになっているんです。

ビッグテックが一斉にエッジAIへ

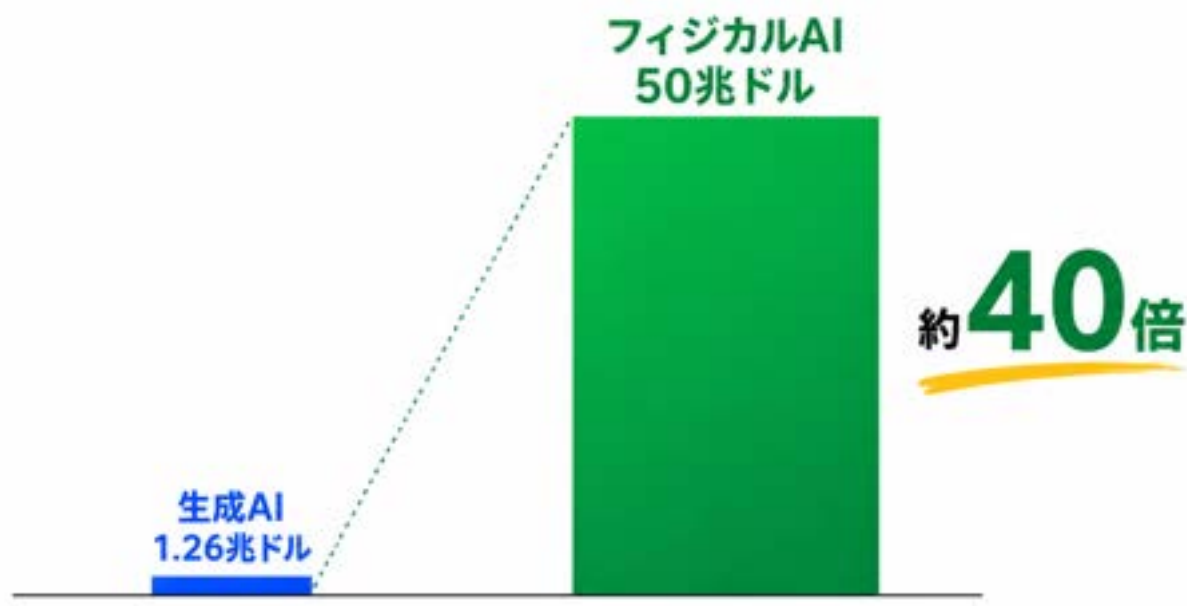
実際、世界中の大富豪やビッグテックが一斉にこの流れに参入しています。大きな節目となりうるのがOpenAIの新製品です。一部報道によれば、彼らはこの秋、Appleで初代iPhoneやMacのデザインを行った天才デザイナー、ジョナサン・アイブと共同開発した初のAI専用イヤホン「Sweetpea」を発表予定です。

しかも単なる音楽再生デバイスではありません。画面を見る、手で触るという前提を捨て、音声だけで操作を完結させられる可能性を秘めたAIイヤホンです。初年度だけで4,000万から5,000万台の出荷を計画しているとも言われています。

これに負けじと、業界の顔ぶれも次々と動いています。エヌビディアのジェンスン・フアンは、このトレンドを「フィジカルAI」と名付け、車も工場も倉庫も、動くものすべてがロボット化しAIが宿る時代が来ると語り、その市場規模は製造業と物流だけで50兆ドルに達すると見積もっています。

50兆ドル。数字が大きすぎるので、比較してみましょう。

比較するとわかりやすいと思います。生成AI市場、ChatGPTのような対話AIやテキスト生成の市場は、2034年でおおよそ1兆2,600億ドル規模とされています。フィジカルAIの50兆ドルは、その約40倍です。



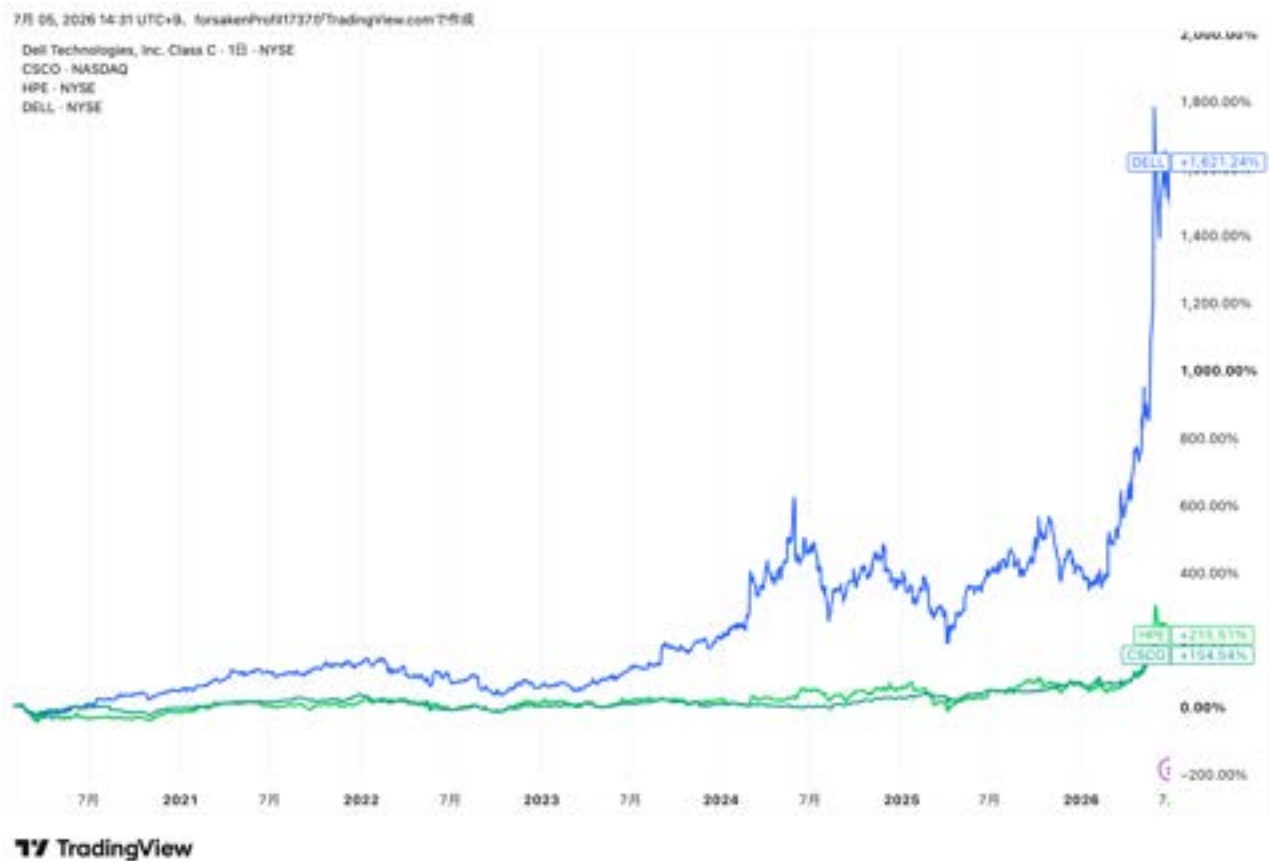
生成AIでも1000%を超える企業がいくつも生まれました。その約40倍の市場となれば、ChatGPTブームすら霞むほどの規模です。

この流れに日本も乗っており、ソフトバンクグループの孫正義氏が、次に1兆ドル規模の企業が誕生する分野はフィジカルAIとロボティクスだと予言しこの分野への投資を加速させています。そしてイーロン・マスクです。彼はヒューマノイドロボットのOptimusが将来的にテスラの自動車事業を上回り、10兆ドルもの収益をもたらす可能性があるとの壮大なビジョンを語っています。

エヌビディア、OpenAI、ソフトバンク、テスラ。テック業界の主役たちが一斉にエッジAIへ舵を切っています。

ちょっと待ってください...そういえば、ショーンってエッジコンピューティングにもかなり前から注目されていましたよね？実は2020年の時点で、私はこの流れをひとつの大きな転換点として見ていました。当時まとめたレポートでは、これからの10年は「クラウドの時代」ではなく、「あらゆるものがつながる時代」になると指摘しました。

その初期段階として注目したのが、デル、シスコ、ヒューレット・パカードでした。



今回は「AIそのものを現実世界に持ち出す」

ただし、今回は規模が違います。前回のエッジコンピューティングは、「インターネットをどう広げるか」という話でした。しかし今回は、「AIそのものを現実世界に持ち出す」という段階に入っています。そしてここで重要なのは、この変化が一社の戦略ではなく、エヌビディア、OpenAI、テスラ、そしてソフトバンクといった主要プレイヤー各社で同時に起きているということです。私はAIのクラウドからエッジへの移行に、3年前のマイクロン、あるいはそれ以上のチャンスがあると見ています。

マイクロン以上のチャンスになり得るのか。重要なのは、第二幕でも「ボトルネック」を見つけることです。

第一幕では、「AIの処理が追いつかない」というデータセンターのボトルネックを解決したマイクロンやサンディスクの株価が急上昇しました。第二幕でも、まったく同じことが起きる可能性があります。エッジへの移行を阻む最大のボトルネックを解決する企業が、最大の利益を得る可能性を秘めています。

データセンターは「温室」、エッジは「砂漠」

一つ想像してみてください。温室で大切に育てられた花を、砂漠に放り出したら、どうなると思いますか？

それが、今まさにAIメモリに起きようとしている変化なんです。データセンターというのは、AIにとっての温室そのものです。空調が効き、冷却設備が整い、電力も安定して大量に供給される。これ以上ないほど至れり尽くせりの環境です。

宇宙空間では、AIチップは放射線にさらされます。工場のロボットは、振動や粉じんの中で動き続けなければなりません。自動運転システムは、真夏の炎天下から極寒の道路まで、あらゆる環境で瞬時に判断しなければならない。しかも、多くの端末は、データセンターのようにコンセントから電力を得られるわけではなく、限られたバッテリーで動く必要があります。

AIが現実世界へ飛び出すには、高速で、低消費電力で、過酷な環境にも強い。これまでとは全く違う新しいメモリが必要になります。

おっしゃる通りです。世界中の企業がこのボトルネックの解決策を探しています。そして私が注目しているそのメモリは、実はこのスマートウォッチの中にも搭載されています。

この小さなチップこそが、エッジへの移行を阻む最大のボトルネックを解決するメモリです。

「DRAMのように高速でデータを処理できて、なおかつ、NANDのように電源を切ってもデータが消えない」両方の性質を併せ持つ、第3のメモリです。

DRAMでもNANDでもない「第3のメモリ」

DRAMのように高速で、NANDのように不揮発性も併せ持つ。いわば両方の「いいところ取り」です。

電気ではなく「磁気」で記録する

簡単に言うと、電気ではなく磁気でデータを記録するメモリです。従来のメモリは情報を覚えておくために、常に電気を流し続ける必要がありました。。ですがこのメモリは、ミクロの磁石の「向き」でデータを記録します。磁石なので、電源を切っても向きは変わらない。だから電気をほとんど食わず、一瞬で作業を再開できるんです。

DRAMのように処理スピードも高速で、NANDのような不揮発性を併せ持つなら、両方を生かせるということですから、マイクロンの1400%超や、サンディスクの4000%超さえも上回る、投資チャンスになる可能性を感じます。

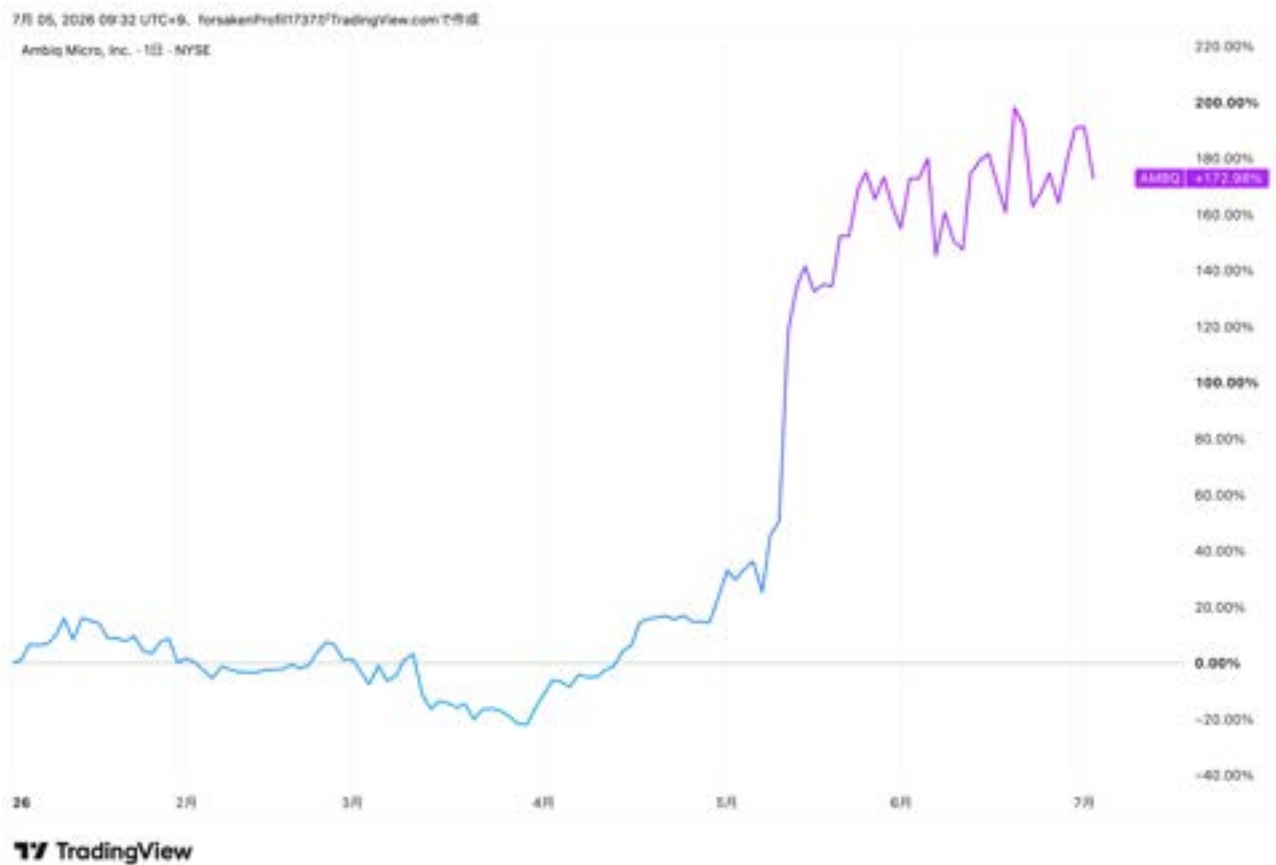
すでに始まっている3つのサイン

ただ「なるかもしれない」ではなく、すでに始まっていると私は考えています。なぜなら今年に入ってからだけでも、異なる場所で3つのサインが光り、立て続けに株価を動かしています。

サイン1：腕の上

まずは腕の上から。最近発売されているGoogleのFitbitのユーザーレビューを見ると、「1回の充電で1週間電池が持つ」という声が増えているのをご存じでしょうか？一昔前は毎日充電しても夜には切れていたのにもかかわらずです。

大きな理由の一つがこのメモリです。スマートウォッチは「動いたり止まったり」の繰り返し。必要な瞬間だけパッと動き、使わないときは電力を使わないですね。それを実現したのが、ウェアラブル半導体の新興企業です。最新プロセッサにこのメモリを採用し消費電力を削減しました。同社の株価は年初から170%を超える上昇を記録しています。



Trading Viewより2026/1/2~2026/7/2

「一瞬でセーブして電源を切る」という特性が、スマートウォッチと非常に相性がいいのです。

ウェアラブル市場全体が、2032年には現在の30%から80%までAI搭載率を高めていくと予測されている中、この企業はその流れをいち早く先取りした一社なんです。このメモリをいち早く実用化した企業に投資資金が流れ始めている。これが、最初の重要なサインです。そしてこの動きは、スマートウォッチのような身近なデバイスだけにとどまりません。

サイン2：モビリティ

モビリティ分野です世界最大の半導体ファウンドリ企業TSMCは、すでにこのメモリの量産を実現しており、車載半導体大手のNXPと組んで車載向け組み込みメモリを共同開発しています。

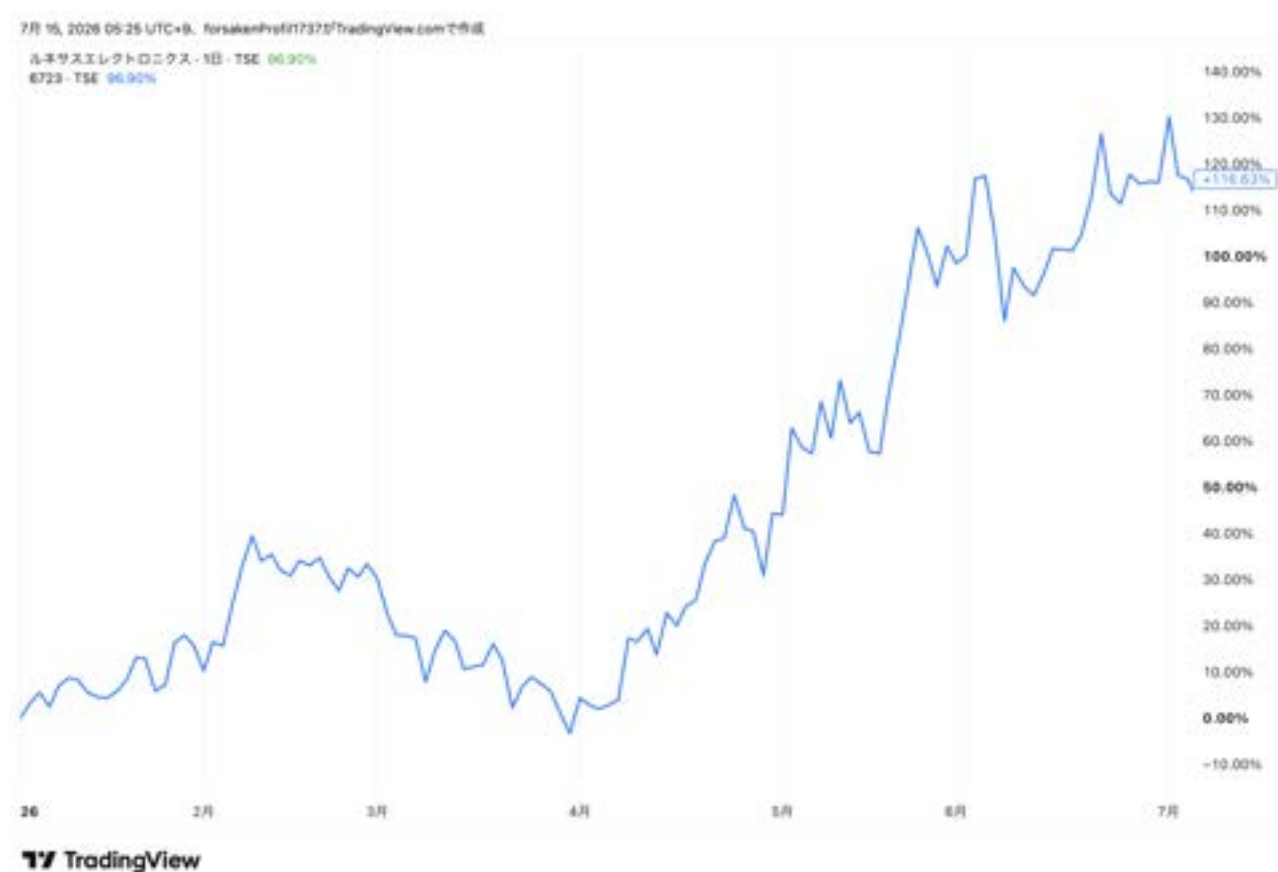
しかも、なぜ自動車にこのメモリが必要なのか、わかりやすい数字があります。20メガバイトのデータ更新が、従来のメモリでは約1分かかるところ、このメモリなら約3秒で終わります。しかも150℃という過酷な環境でも20年間データを保持できます。

約1分かかっていた更新が約3秒に。20分の1への短縮です。

これからの車は、スマートフォンのようにソフトウェアで機能が更新される「走るコンピューター」になります。電源が落ちてもデータが残り、高温環境でも長期間信頼できるメモリが不可欠だからこそ、このシフトが起きているんです。この波は、すでに日本の大手半導体企業にも届いています。

この期待感は、すでに株価にも現れています。多くの方が知っている企業です。

それが、自動車半導体大手のルネサスエレクトロニクスです。自動運转向けの次世代技術としてこの車載用メモリを展開しており、株価は年初から2.1倍に上昇しています。



Trading Viewより2026/1/5~2026/7/3

スマートウォッチでは省電力、自動車では高速な更新と信頼性。3つ目は何になるんですか？

サイン3：国家単位で動く

3つ目のサインは、国家単位で動いています。ただ、その話をする前に、どうしても触れておかなければならない人物がいます。

これまでの2つのサインとは違い、3つ目には、ある一人の人物の野望が深く絡んでいるんです。しかも、その野望のスケールは、腕時計や自動車どころではありません。

イーロン・マスクです。

第4章

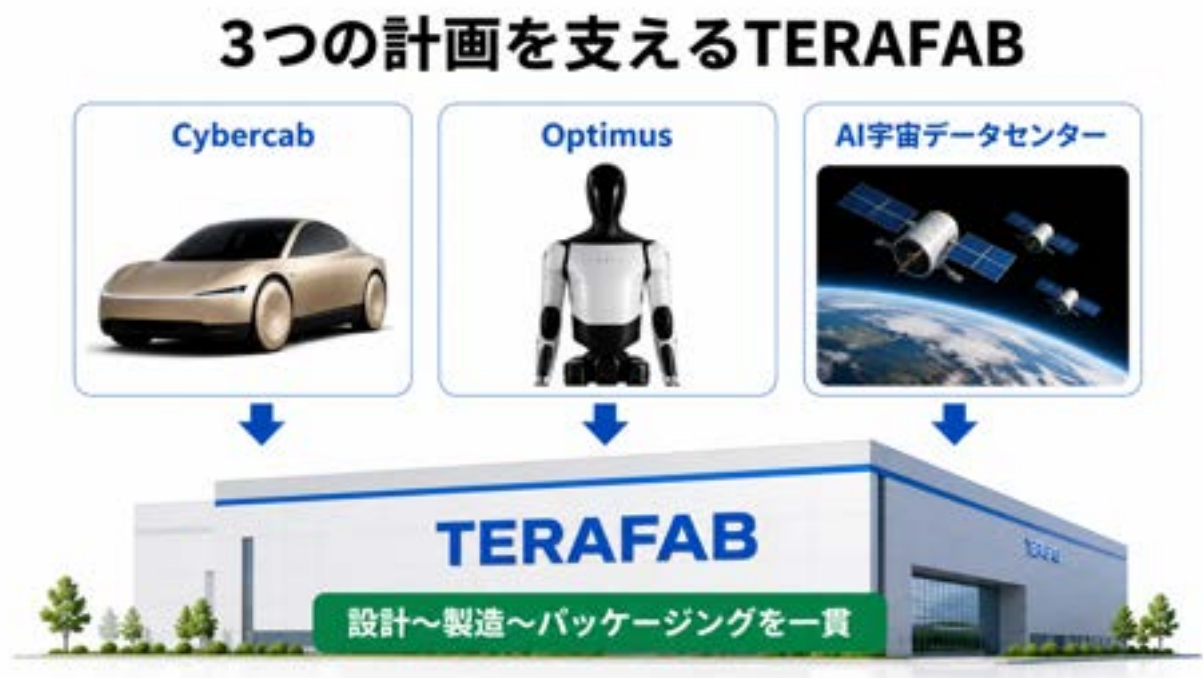
イーロン・マスクが描く3つの未来と宇宙のボトルネック

Cybercab、Optimus、AI宇宙データセンター

覚えていますか？今日の冒頭で、マスクが同時に3つの未来を作ろうとしていると触れました。ロボタクシー「Cybercab」、人型ロボット「Optimus」、そしてAI宇宙データセンター。

実は今、この全てのプロジェクトにとって要となる、そして半導体業界の勢力図を根底から塗り替えようとしている、マスクの巨大プロジェクトをご存じでしょうか？

マスクの巨大プロジェクト「TERAFAB」



通称「TERAFAB」と呼ばれる、総投資額1190億ドル規模の計画です。マスクはテスラ、SpaceX、xAIの半導体の設計から製造、パッケージングまでを、すべて1つ屋根の下で完結させようとしています。この工場では、主に「2つの異なるAIチップ」が製造されると言われています。

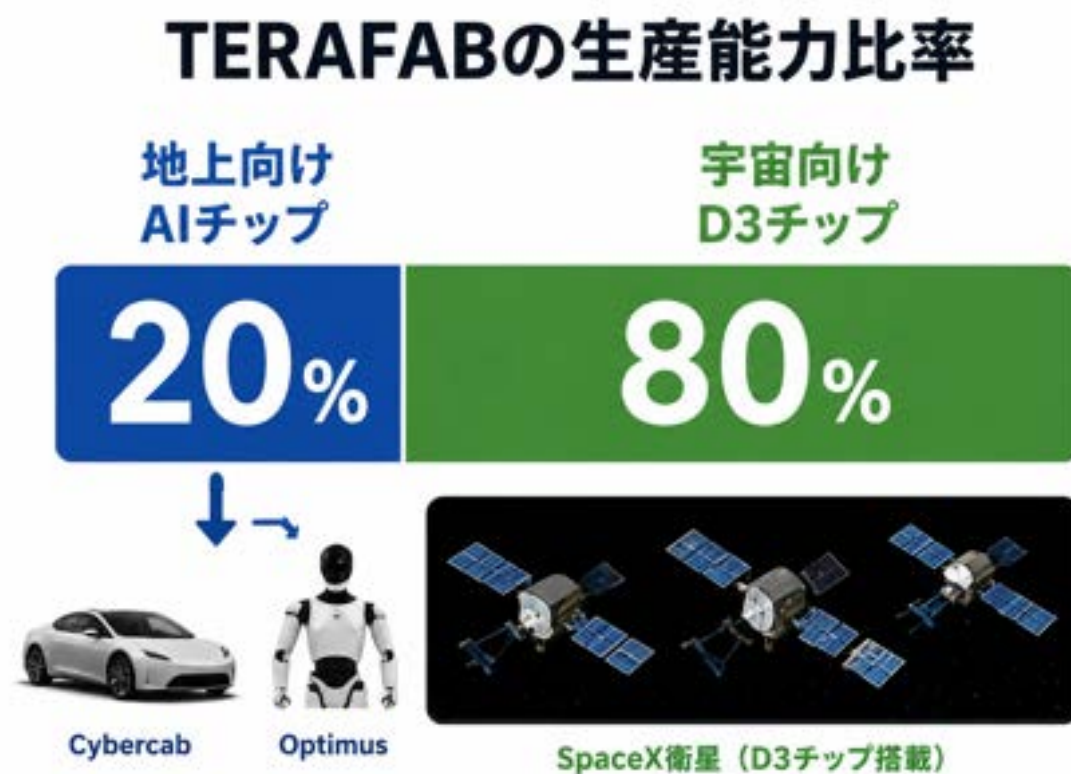
まず1つ目が、テスラの完全自動運転車「Cybercab」や、人型ロボット「Optimus」を動かすための、いわば地上向けの次世代AIチップです。

テスラが自社の自動運転EVやロボットの頭脳を内製化するための構想です。

しかし公式文書によれば、このチップに割かれる割合は生産能力のおよそ2割程度に過ぎません。

宇宙専用AIチップ「D3」

このテラファブで製造する大本命が、SpaceXの軌道衛星向けに設計された宇宙専用のAIチップ「D3」です。マスクの頭の中にあるのは、土地も電力も足りなくなっている地球を飛び越え、24時間100%の太陽光エネルギーが降り注ぐ宇宙空間に、巨大なAI衛星サーバーを何万台も浮かべる構想です。つまり、「AIデータセンターごと宇宙へ引っ越す」という計画なんです。



SpaceXが示した28兆ドル規模のAI市場を獲得する上で、最大の課題になるのが、AIを動かすための膨大な計算能力です。そしてイーロン・マスクが、その計算能力の制約を突破する次世代インフラとして構想しているのが、宇宙空間にAIデータセンターを展開する「宇宙データセンター構想」なのです。

宇宙データセンターは、爆発的に成長するAI市場を取り込むための基盤づくりでもあります。

28兆ドル市場の前に立ちはだかる「宇宙環境」

しかし、この28兆ドル規模の富を取りにいこうとするマスクの前に、最大の障壁が立ちはだかつています。それが、過酷な「宇宙環境」における耐久性の壁です。地球の磁場に守られていない宇宙空間では、強烈な宇宙放射線が飛び交っています。従来のフラッシュメモリやDRAMを積んだチップを、そのまま宇宙に打ち上げたらどうなるか。実は、SpaceX自身が投資家向けに開示している公式資料の中で、まさにこのリスクを明確に認めています。さらに彼らは資料の中で、耐放射線性部品、遮蔽、および冗長性をシステムに組み込んでいるものの、これらの対策はあらゆるシナリオにおいて重大な悪影響を防ぐには不十分である可能性がある、とも開示しているんです

つまり、宇宙放射線によってシステムが壊れたら、AI衛星が宇宙ゴミに変わってしまうということですね。

たった1ビットがひっくり返る「ビット反転」

まさにその通りです。宇宙放射線がメモリチップに直撃すると、データの「0」と「1」が文字通りひっくり返る「ビット反転」という現象が起きます。

「ビット」というのは、コンピューターの中にある、いわば無数の豆電球のようなものだと思います。それぞれの豆電球が「点いている(1)」か「消えている(0)」かの組み合わせで、あらゆるデータを表現しています。

ところが宇宙線がたった一つの豆電球の状態を、勝手に点けたり消したりしてしまう。それが「ビット反転」です。

実際に昨年起きた話を見ていきましょう。2025年10月、メキシコのカンクンからアメリカ・ニューアークへ向かっていた旅客機が、何の前触れもなく突然急降下したんです。機内は大混乱となり、15人以上が負傷しました。当初は機体の故障か、パイロットのミスかと考えられていました。しかし調査を進める中で浮かび上がってきたのは、もっと意外な可能性でした。それが、宇宙線によって、メモリの「0」と「1」がひっくり返った可能性だったのです。

1ビットで6,000機の緊急運行停止措置



1ビットの反転が、コンピューターに誤った信号を送り、機体の異常な動作につながった可能性が指摘されたんです。この事故を受けて、同じシステムを搭載するおよそ6,000機が緊急運行停止措置の対象となりました。

たった1つのデータの変化が、6,000機もの飛行機に影響を与えた可能性があるということです。

地上ですらこれだけの影響が出るわけですから、地球の磁場に守られていない宇宙空間では、そのリスクは比較になりません。だからこそ、宇宙産業の最前線では、放射線にさらされてもデータを守ることができるメモリの確立が渴望されているんです。

そこが今日の核心です。

宇宙で浮かび上がる「第3のメモリ」

実は、私たちがここまで見てきたこの“第3のメモリ”こそ、その有力候補なんです。しかも、これは研究室の中で可能性を論じられているというレベルの話ではありません。

このメモリは、NASAが木星を目指す探査ミッション「ルーシー」に、実際に搭載されて飛行しています。何億キロも離れた宇宙で、修理ができないまま何年も動き続けなければならないミッションに選ばれているという事実が、このメモリの信頼性を何より物語っています。半導体専門分析メディアのセミコンダクターXも「このメモリは、次世代の宇宙メモリとしての地位を確立しつつある」と評価しています。

ここで「D3チップ」と、このメモリの話がつながります。

私が言いたいことが見えてきましたか？

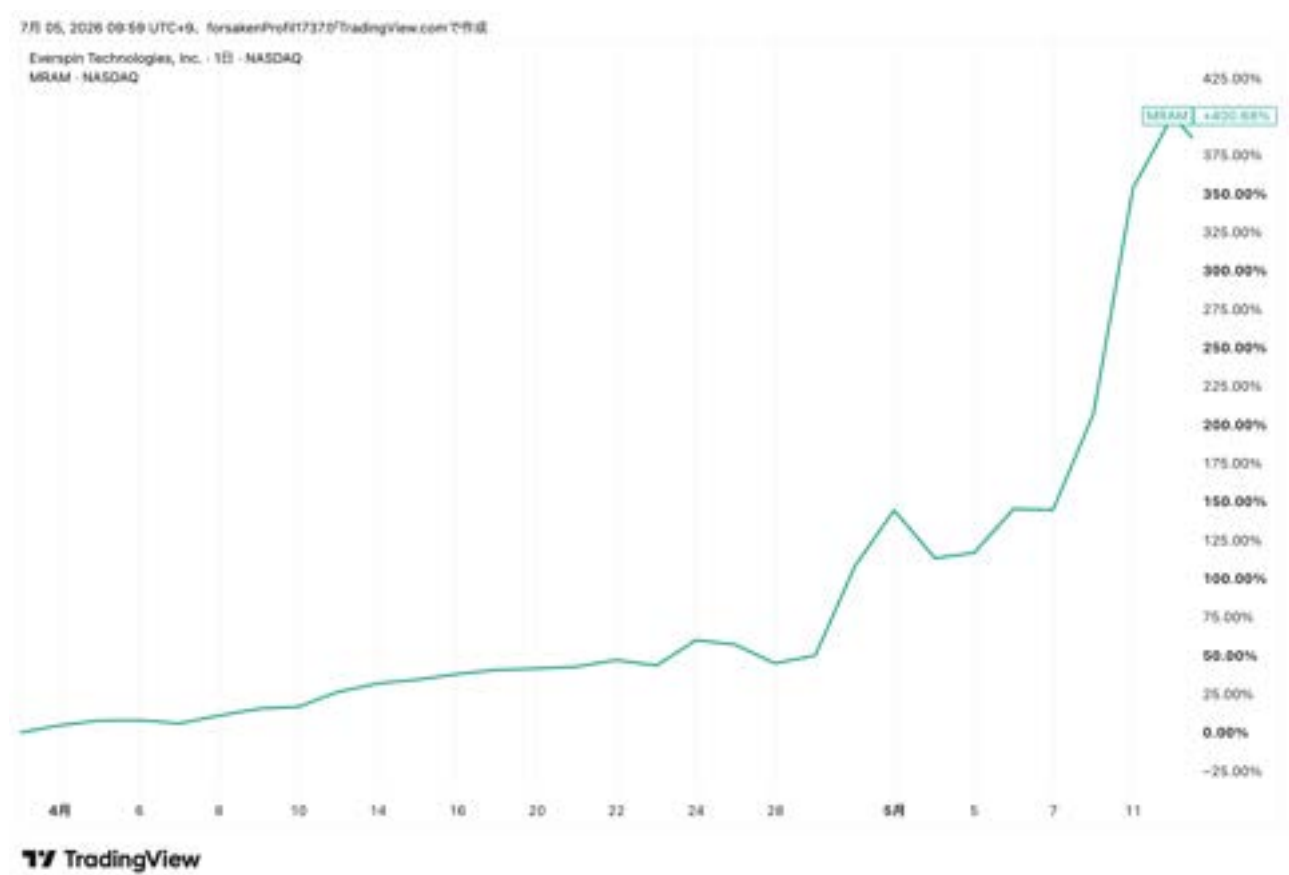
イーロン・マスクが人類史上最大級のTAMを獲得するために造る「D3チップ」。そのチップを宇宙空間で機能させるための有力なピースとして浮かび上がってくるのが、この第3のメモリという技術だということです。

まさに、マスクの野望を支える可能性を秘めたメモリです。

国家プロジェクトまで動き始めた

そして、このメモリをめぐる動きは各国政府の間でも動き始めています。韓国では、サムスンが開発した最先端のこのメモリを2030年にSpaceXのロケットで宇宙へ打ち上げ、過酷な宇宙放射線環境下で性能を実証する国家プロジェクトが始動したと報じられています。

さらに米国では、この分野のリーディング企業が、軍事および航空宇宙向けの4,000万ドル規模の契約を発表しました。これを受けて、一時同社の株価は400%超えの上昇を見せています。



Trading Viewより2026/3/31~2026/5/12

最初はスマートウォッチの中の小さなメモリの話でした。それが自動運転、そして宇宙まで、同じ技術につながっていきます。

投資家として注目して欲しいのはまさにそこです

スマートウォッチから自動車、自動車から国家プロジェクトへ。関わるプレイヤーも動くお金の規模が段違いに大きくなっているのがわかりますか？

私は今まさに、市場の主役が入れ替わる転換点に差し掛かっていると考えています。世間の投資家がロボタクシーやヒューマノイドロボット、AI宇宙データセンターに注目している裏で、そのすべてを支える可能性を秘めたこの新しいメモリ市場が、一気に存在感を増そうとしている。私はそこに、大きな投資チャンスがあると考えています。

「第3のメモリ」から利益を狙う3つの方法

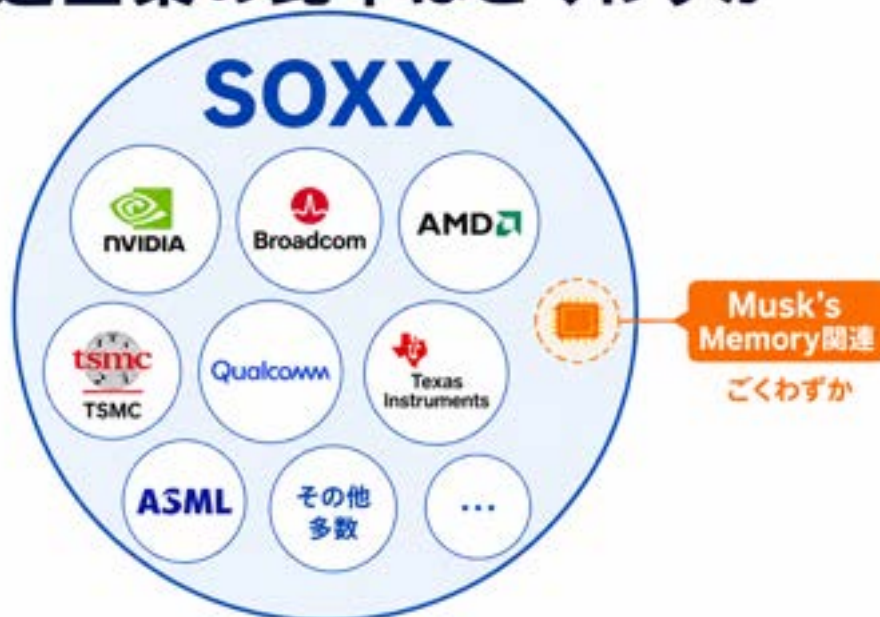
まず知っておきたい「最も簡単な方法」

最適な方法を紹介する前にこのトレンドに乗る最も簡単な方法から見ていきましょう。半導体業界全体に幅広く分散投資できる、代表的なETF「SOXX」に投資をするという方法です。個別株を選ぶ手間もリスクもなく、Musk's Memoryを含むAI半導体全体の追い風を、まるごと受けることができます。

しかし、Musk's Memoryというテーマに投資する上で、SOXXを保有することには注意しておきたい点があります。

もちろんSOXXは優れたETFです。分散が効いていて、半導体業界全体が成長すれば、着実にリターンを得られます。ですが、私がここまで見てきたテーマは、「半導体業界全体」ではありません。その中でも、ごく一部の企業だけが持つ、特定の技術の話です。SOXXには数十もの銘柄が組み込まれていますが、その大半を占めるのは、NVIDIAやブロードコムといった、すでに時価総額の数兆ドルを超える巨大企業です。Musk's Memoryに直接関わる企業の比率は、指数全体からすればごくわずかで、値動きの中に埋もれてしまいます。

関連企業の比率はごくわずか



SOXXでは、このテーマの恩恵が指数全体の値動きの中に薄まってしまう可能性があります。

マイクロンが1度目の相場で1400%上昇したとき、SOXX自体もある程度は上昇しましたが、その上昇率は、マイクロン単体とは比べ物にならないほど小さなものでした。



Trading Viewより2023/7/3~2026/7/2

ですから私は今回も、ETFではなく、この変化の恩恵をより直接受ける企業に注目しています。私が注目するのは3つの異なるタイプの企業です。

投資法1：「関所」を押さえる

1つ目は、このメモリを作るために欠かせない製造装置を握る企業です。

どんな技術にも、絶対に避けて通れない"関所"が存在します。株式市場の歴史を振り返ると、関所を握った企業は、誰が競争に勝っても関係なく利益を得続けてきました。

実際、半導体の露光装置を独占するASMLを、2025年の「ナンバーワン株」として推奨しました。それから現在まで、ASMLの株価はおよそ2.5倍になっています。



Musk's Memoryの世界にも、ASMLと同じような構造を持つ"関所"企業が存在します。このメモリを量産化する上で、この企業の装置がなければ、前に進めない決定的な工程があるんです。しかも驚くべきことに、今回私が選んだその関所銘柄は、日本の企業です。

私が特定した企業は、このメモリの心臓部を作るために不可欠な原子レベルの超薄い膜を、ピタッと貼り付ける装置で、世界シェアの実に75%を握っています。

これにより例えばSamsungでもTSMCでもIntelでも、どこかがこのメモリの量産工場を建てようとするれば、その工場には、この企業の装置が必要になる可能性が高いということです。つまり、どのメーカーが勝っても、この企業には仕事が回ってくる可能性がある、だから私は、この企業を"関所"と呼んでいるんです。しかも、この企業は日本人であれば誰もが名前を知っている、非常に知名度の高いブランドの子会社なんです。

メモリメーカーの勝ち負けを予想するのではなく、その勝負が始まるたびに必要になる「道具」を押さえる考え方です。

2つ目は何でしょう？

投資法2：「裏口」から狙う

2つ目は私が「裏口銘柄」と呼んでいる企業です。

一つ目の企業が装置を売ることによって稼ぐ会社だったのに対し、「裏口銘柄」はまったく違う稼ぎ方をします。装置も製品も売らず、"技術の使用権"を貸し出すことで稼ぐ会社です。

半導体業界には、自分ではほとんどチップを作らないにもかかわらずその技術を世界中の企業へライセンス供与することで、莫大な利益を稼ぐ会社があります。例えば、ARMです。ARMはCPUそのものを大量生産している会社ではありません。

CPUの設計をライセンスし、その技術をAppleやQualcomm、NVIDIAなど、世界中の企業が使うたびに収益が入るビジネスモデルなんです。

Musk's Memoryにも、これとよく似た立場の会社があります。この会社は、自らメモリの生産を行うのではなく、このメモリに関する特許を、大手企業へライセンス供与することで収益を得ています。

製造リスクや工場投資を負わず、ライセンス料を受け取る。これが「裏口」という考え方です。

だから利益率が驚異的なんです。粗利益率は約78%。4%程度の配当まで出しています。

粗利益率約78%。アップルの粗利益率約50%という比較から見ても、非常に高い水準です。

7

粗利益率の比較

裏口銘柄企業
(特許ライセンスモデル)



約78%

Apple



約50%

配当利回り
約4%

まさにそこが魅力です。このメモリがスマートウォッチ、ロボット、自動車、宇宙へと広がれば広がるほど、その技術を使う企業は増えていきます。つまり、自ら工場を建てなくても、高い利益率でその普及の恩恵を受けられる可能性がある。だから私は、この企業を「Musk's Memoryへの裏口銘柄」として注目しているんです。

投資法3：「ムーンショット」を狙う

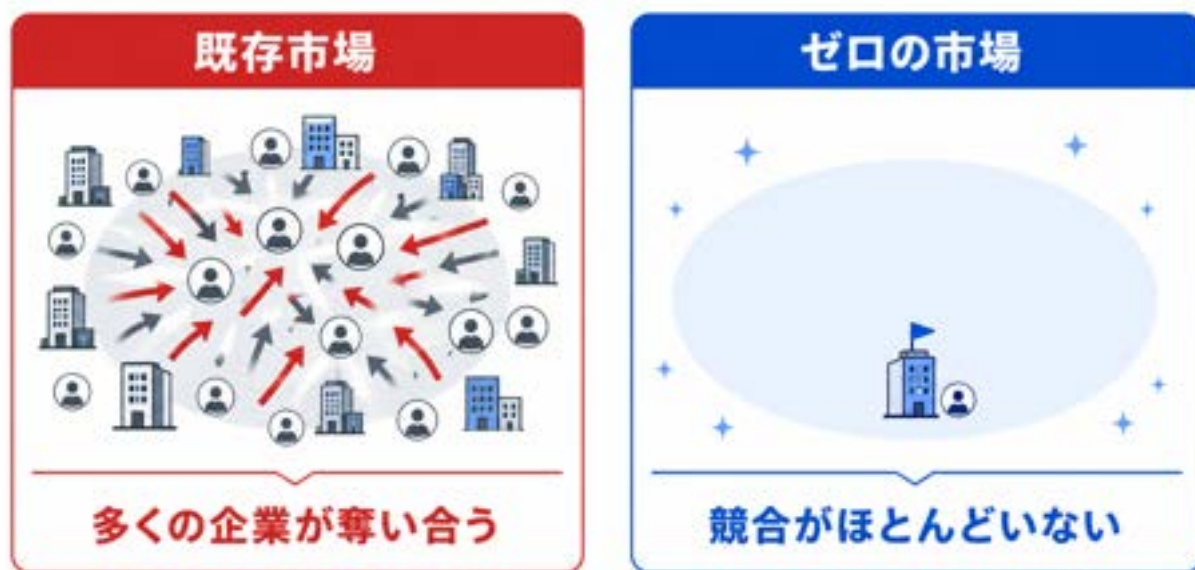
3つ目が「ムーンショット枠」です。一言で言えば、普通の投資では得られないような、圧倒的なリターンを狙う挑戦的な戦略です。

この枠を選ぶ上で、私が大切にしている考え方があります。NVIDIAの創業者、ジェンスン・フアンの言葉です。

「ゼロ・ビリオン・달러・マーケット」に賭ける

彼は、NVIDIAが新しい市場に参入するときのことを、いつも「ゼロ・ビリオン・달러・マーケット」つまり「まだ市場規模ゼロの市場」に賭けることだと表現しています。彼らが狙ったのは、当時誰も見向きもしなかった「GPU」という未開拓の領域でした。それでも、既存市場の奪い合いではなく、まだ誰もいない市場を切り拓く選択をした。

既存市場とゼロの市場



その結果、エヌビディアの株価は上場から49万%を超える成長を遂げ、今や地球上で最も重要な企業の一つになっています

誰も信じなかった「ゼロの市場」だからこそ、爆発的なリターンが生まれることがあります。

同じように、誰も信じなかったEVに賭けて約240倍の成長を遂げたテスラも、DVDレンタルが当たり前の時代にストリーミングを始め約720倍の成長を遂げたネットフリックスも、みな「ゼロの市場」からスタートしています。

ここで一つ、ここで一つ考えてみてください。エナジードリンクが流行する前に「モンスタービバレッジ」という無名の飲料会社に10万円投資していたら、今頃いくらになっていたと思いますか？

実際には、約1億1,983万円です。リターンにして、119,831%。この一社だけで、老後の心配が解決するほどの上昇です。

モンスタービバレッジが参入した当時、エナジードリンクという市場はほとんど存在していませんでした。NVIDIAのAIチップと同じ、"ゼロの市場"だったんです。だからこそ、これだけ桁外れのリターンが生まれました。なぜ、最初に製品を出すことが投資家にとって最大のリターンになるのか。それは、後から参入してきた巨大企業や投資家が逆立ちしても手に入れられない「先行者利益による市場の独占」を、最も安い価格で丸ごと手に入れられるからです。

大手が市場の立ち上がりを待つ間に、パイオニアは製品、データ、技術の堀を先に作っていきます。

今、この「Musk's Memory」の世界において、一番乗りで製品を送り出した、かつてのエヌビディアやモンスタービバレッジと同じ構造を持つ小さな企業が存在します。

昨年上場したばかりのこの企業は、多くの企業が次世代メモリの可能性を模索する中、最も消費電力がシビアなウェアラブル端末向けとして、この次世代メモリを組み込んだ超省電力チップを、製品化しました。直近の決算でも、売上高は前年同期比で60%近く増やし、すでに、私たちが日常で使うウェアラブル端末の中で動き始めています。もちろん規模が小さいためリスクはありますが、このゼロの市場が業界標準になれば、モンスタービバレッジのような成長カーブをなぞる可能性を秘めています。

「関所」で堅実に、「裏口」で効率よく、そして「ムーンショット」で大きな夢を狙う。3つの異なる狙い方です。

さらに別の角度から利益を狙う

ここまで触れてきた3つのタイプについては、それぞれの企業名やティッカーシンボルだけでなく、なぜ私がその企業を選んだのか。競合と比べてどこが優位なのか。どんなリスクがあり、どのような投資スタンスで向き合うべきなのか。そこまで含めて、特別レポート「Next Memory Millionaire ポートフォリオ～AIをクラウドからエッジへ移す数兆ドルのボトルネックを突破する企業群～」にまとめました。

さらに、ここまででは、どうしてもご紹介しきれなかった「この変化の波から、別の角度で利益を狙える重要な銘柄」についても、レポートの中で追加で紹介しています。



レポートの受け取り方はメールでご案内している動画版をご確認ください。

3年前、世間はエヌビディアのGPUばかりを追いかけて、多くの人がAIブームのもう一つのボトルネックであるメモリを見過ごしていました。2020年、私がエッジコンピューティングを予測した時も、世間はまだ、その言葉すら知りませんでした。そして今、多くの人がAIのエッジ化。すなわちAIを現実世界へ連れ出す重要なパーツになりうるMusk's Memoryの存在に気づいていません。

大切なのは、このパターンが見えたときに、行動できるかどうかです。ここまで本書を読んでくださった皆さんには、最初の一步を踏み出すチャンスがあります。

-免責事項-

- ・本コンテンツは、お客様の投資判断や運用戦略の参考となる情報の提供を目的として作成されたものです。有価証券の取引等の投資は、ご自身の判断と責任において行ってください。
- ・本コンテンツは、将来の成果を保証するものではありません。
- ・本コンテンツに掲載している情報の収集・分析等については、できる限り注意を払っておりますが、これらの情報についての完全な正確性及び信頼性等を保証するものではありません。
- ・本コンテンツの利用等に関し、お客様に生じたいかなる損害についても、弊社は何ら責任を負うものではありません。
- ・本コンテンツの情報（投資銘柄、投資手法等）は、情報そのものに価値があります。本コンテンツの情報を、出版・講演活動及びその他一切の商用目的に利用すること並びにブログ・SNS・電子メディアによる配信等により購入者以外の第三者に公開することを固く禁じます。そのような行為は、損害賠償請求等の法的な対応の対象となります。

イーロン・マスクが描く3つの未来から見える
【新】メモリトレンド

行日 2026 年 9月

著 者 大富豪の投資術

レガシー・リサーチ・チーム

発行者 江崎 孝彦

発行所 株式会社Wealth On

〒 541-0052

大阪府大阪市中央区安土町 2 丁目 3-13

大阪国際ビルディング 23F